

JCCP 講演会抄録

JCCP 国別戦略ワーキンググループ（WG）では、7月24日、（財）日本エネルギー経済研究所の小山理事をお招きし、「中東・アジア オイルベルトの石油事情」と題して、講演をしていただきました。今年度の国別戦略WGでは、日本への石油供給安定化にかかわる課題と、それに対するJCCPの事業のあり方を、石油供給源の中東産油国のみならず、石油の大消費地域になりつつあるアジアとの関係の中で考えていこうとしています。今回の講演では、中東・アジア全体を広く捉えて、この地域全体で石油の供給と需要がどのように変化し始めているのか、またそれが将来どのように発展していくことになるのか、小山理事に大きな視点から解説をお願いしました。

中東・アジア オイルベルトの石油事情 —今後の石油安定供給に向けた課題—

講師：財団法人 日本エネルギー経済研究所
理事 小山 堅

1. 世界の石油需給と原油価格の高騰の背景

(1) 世界の石油需要の動向

このところずっと原油高が続いています。特に昨年からは、物価上昇に影響を及ぼすようになってきています。

原油価格の形成には、ファンダメンタルズ、投資・投機資金の流入、地政学的リスクといったいろいろな要因が影響していますが、そのいずれもが価格高騰をもたらす方向に作用してきています。問題を短期的に解決するのは、容易ではありません。

その中でも、基本はやはりファンダメンタルズです。IEAが、2009年までの世界の石油の需要の見通しを発表しています。これをみると、2005年から2008年まで原油価格が上がり続けているにもかかわらず、毎年100万B/D近い需要増加が続いています。さらに2007年から2009年の予測では、世界全体の需要増加の大部分がアジアと中東となっていて、アジアと中東で需要が増えるが故に世界の石油需要が増えていく構造になっています。

今後中国やアジアの経済は成長を続けるだろうし、中東もオイルマネーの大量流入によって経済が活況を呈しています。この2つの地域が、世界の石油需要の大きな原因になっていくことは間違いのないと思います。



(2) 供給側の状況

世界の石油供給にも、大きな変化が現れています。2006年・2007年・2008年と、大変な原油高が続いているにもかかわらず、非OPECの原油の生産量は頭打ちになってきています。本来ならば、原油価格が高いと上流部門への投資が活発になり、原油の生産が増えるはずですがそうなってはいません。むしろ高価格が続く中で、生産が低迷してきています。

原因は、欧州では北海油田を中心に生産が減っており、アメリカも生産がどんどん減ってきているというように、非OPECの主要油田が成熟期に入ってきているところにあると考えられます。

こうなると、唯一増産余力を持つ OPEC の対応が非常に大事になりますが、OPEC は少しずつ高価格志向を強め、より高い値段を追求する方向に変わってきています。これまで OPEC は、原油が 100 ドル / バレルを超えても増産しないという決定を繰り返してきました。これから先の原油市場は、サウジを中心とする中東の OPEC の動向に、大変大きな影響を受けていくことになります。

2. 国際石油市場の課題

(1) 新興国の需要増大と資源の獲得競争

原油だけでなく天然ガスや石炭など、化石燃料全般で価格が上昇してきています。中長期的に需給が逼迫していくという懸念があり、中国やインドなどの新興国がエネルギーの大輸入国になり、その結果資源の獲得競争が激化していくという心配があります。

エネルギー資源の獲得競争は、避けなければなりません。買い手が過度に競争を繰り広げていって、どんどん価格をつり上げていってしまうのはすべての人にマイナスです。第 1 次・第 2 次石油危機の際、日本が高値で買ってしまった結果、自分たちも世界中もみんな困った経験を持っています。

しかし中国やインドなどアジア諸国は、当時まだ輸出国だったのでこうした経験に乏しく、日本が様々な形で協力をしたり、知識をシェアしたりすることで市場安定化の方に取り込んでいくことが大事です。中国やその他のアジア諸国が、現在個別にいろんな政策や戦略を打っています。それが過度に囲い込み的なものになったり、重商主義的なものになったりならないように協力していくのは、まさに日本にとって重要な課題です。

(2) 資源的な石油供給の制約（ピークオイル）

供給サイドでは、地政学的リスク・資源ナショナリズム・市場支配・マーケットパワーといった問題が大きくクローズアップされています。更にエネルギーの資源的供給制約、地球温暖化を始めとする環境問題という制約も出てきています。国際石油市場には、様々なリスク・脅威が出てきています。

その中でも資源的制約から、今後も生産量を増やし続けていけるかどうかは、大きな懸念材料です。新聞等によく出てくる「ピークオイル」という問題です。

どのタイミングで生産量のピークがくるのか、専門家の間で議論されていますが、資源量の観点からすぐにピー

クを迎えることはない、というのが主流派の見方です。ただ、既に北海や米国など、実際にもうピークを打って生産が減っているところがあることに加え、投資制約や資源ナショナリズム等の影響で、世界の原油生産は、約 1 億 B/D ぐらいで頭打ちになってしまうのではないかといい見通しが、多くの専門家の間で出てきています。

3. 中東及びアジアの石油需給の動向

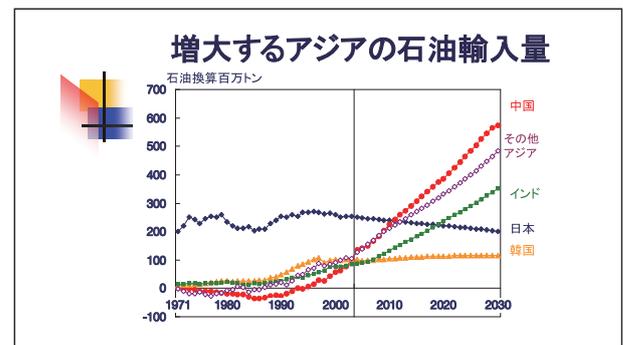
(1) アジアの石油需要の動向

アジアの一次エネルギーの消費は、1990 年からの約 20 年間で大体 2 倍になりました。それに対して純輸入は、同じ期間に約 3 倍に増えており、一次エネルギーの純輸入量は増大しています。2007 年で見るとアジアの一次エネルギーは、約 3 割を輸入に依存するという域外輸入構造になっています。

アジアで最大のエネルギー源は石炭で、次いで石油、天然ガスという順番です。1 位の石炭、3 位の天然ガスは、ともにアジア域内での生産と消費がほぼ一致していて、おおむね自給自足できています。

ところが、石油は約 8 割を純輸入に依存していて、石炭・天然ガスと大きな違いがあります。アジアのエネルギー消費が経済成長とともに増大してくると、その分は石油で埋めるしかないというのが現在の姿です。

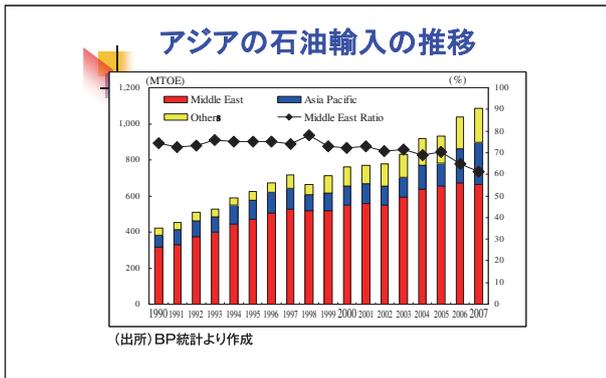
石油の純輸入の拡大をもたらしている根本原因は、中国やインドといった発展途上の大石油消費国です。1965 年は 300 万 B/D ぐらいだったアジアの石油需要は、どんどん拡大が続いてきて、2007 年時点では、2,500 万 B/D 近いところまでできています。(スライド 1) 中国の 2030 年の石油の純輸入量は、5～6 億トン / 年と予測されていますが、これは現在のサウジアラビアの生産量に匹敵します。このような大きな純輸入マーケットが現れてくることは、世界にとって大変大きな影響を持つと思います。



スライド 1

(2) 中東の石油供給の動向

アジアの石油の純輸入は、1,500万 B/D を超え、2,000万 B/D に近づいてきています。(スライド2) この圧倒的な部分は、中東からの輸入です。2007年では、中東からの石油輸入は6割に達しています。アジアの大幅な石油の輸入や需要を支えるだけの資源や生産ポテンシャルを持っている国は、世界中見てもさほど多くはありません。これから先、中東に益々大きく依存することになると思います。

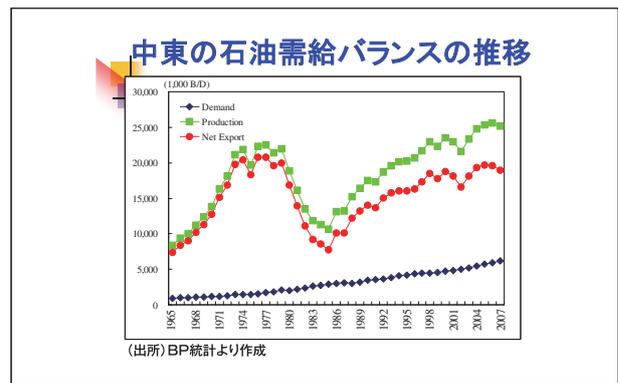


スライド2

中東の石油供給能力を考えていく上で大変大事なものは、中東自身の石油消費量の増大です。1965年には100万 B/D のレベルだった石油消費量は、今や600万 B/D と6倍に拡大してきています。国別に見ると、イランやサウジアラビアが中東でも大石油消費国であり、彼らは大産油国でもある一方で、石油の大消費国になりつつあります。石油の消費の伸びが、石油の純輸出に影響を与えるところまで来ています。どちらの国も、生産を増やすだけの資源のポテンシャルは持っていますが、今後さらに中東自身の石油消費量が増える中で、世界の石油市場にどれだけ供給していけるのか、それを見ていくことは大変大事です。

これまで中東の石油の純輸出量は、ほぼ石油の生産量と同じと考えることができました。70年代、80年代ぐらいまでは、中東の石油生産量イコール中東の純輸出量だったわけです。ところが、中東の経済が発展し社会が発展していくと、当然のことながらエネルギーの需要も拡大し、一番手近にある石油を使うこととなります。中東が発展すればするほど石油の消費が増えていき、内部消費が増える分石油の純輸出が圧迫される傾向がはっきりと出ていることに、注目する必要があります。(スライド3)

中東の産油国自身も自分の国の経済の発展とともに、



スライド3

国内のエネルギー需要が伸びていくことは必至だということがわかっていて、かつそれを合理化効率化することが、自分の国の経済の高度化にとっても大変大事だということに、気がついてきているのではないかと思います。中東は供給地域として重要ですが、経済の発展に伴って増えていくエネルギー需要にどう対応していくのかというのも、これから先見ていかなければならない点です。

4. 日本の石油供給安定に向けて

(1) アジアの中の日本のプレゼンス

日本の輸入は、70年代ぐらいまではアジアの石油輸入の中でも圧倒的な多さでした。1973年で見ると、アジア全体の石油消費の6割強は日本で、アジアの石油市場イコール日本という状態でした。その後、他の地域の石油消費が余りにも急激に伸びていて、2007年では、日本の消費量はアジア全体の5分の1まで低落してきています。

今でも日本は、アジアの中で中国に次ぎ第2位の石油消費国であることには変わりません。しかしながら、明らかにアジアの中でのプレゼンスは変わってきました。日本の石油の安定供給を考えるときには、日本の中だけで考えていくことは、もはや意味を失っており、むしろ増大するアジアの中で日本を考えていくのが、より正しいアプローチになるという気がします。

(2) アジア諸国との協力

日本のような成熟した国も、中国のような新興国も、石油の安定供給やエネルギー安全保障が喫緊の課題になり、様々な政策や戦略を積極的に展開しています。

国内対策としては、省エネ、エネルギー資源の開発、エネルギー源の多様化、産業体制の強化や備蓄制度

の整備がとられています。対外的には、資源外交や自主開発、輸入ソースの多様化、消費国間のエネルギー協力といった政策が進められています。

各国で、エネルギー政策がどんどん実施されていくというのは、非常に大きなメリットがあります。それぞれの国が自分の弱いところを克服していけば、全体として弱みが埋まっていきます。但し、やり方によっては囲い込み的なものになったり、排他的なものになったりしてくると、市場の不安定化につながっていきます。こうした個別政策を補完する意味で、エネルギー協力というのは大変重要だと言えるわけです。

もしそれぞれの国やプレーヤーが協力すれば、今ある資源・資産・資本・技術・ノウハウを最適に活用できたりとか、域外の供給国に対する一定のバーゲニングパワーの向上、効率性の向上やビジネスの機会の創設、そしてより大きくは政治・経済関係の強化といったものも、図れるといういろんなメリットがあると思います。

(3) 中東との協力

アジアとの協力だけではなくて、中東との協力も非常に大事なテーマになってきます。中東には十分な供給ポテンシャルがあり、アジアを中心とした世界のエネルギー需要の増大に対応して、供給能力を増やしていってら

わなければなりません。そして国際市場への輸出を考えると、生産を増やすだけでなく中東自身の国内需要の増大をどう効率化するのが、非常に大きな課題です。中東でも省エネルギーや代替エネルギーを開発していくのが、大変に大事だということです。

日本はこれまでやってきた省エネルギー、代替エネルギー、環境等の技術開発を、もっと強化していくことが必要だと思います。日本には過去30年間の蓄積がありそれが故に、現在技術先進国という立場を確保しています。これから、他の国もキャッチアップに動いてきます。したがってこれを更に強化することは大事な戦略になり、そして今の持っているアドバンテージを使った国際協力も、重要になってきます。

日本は国際市場から石油を調達していますので、国際関係を安定させることは、石油の安定供給、安全保障の鍵になります。国際市場にはたくさんの課題があるわけですので、日本としてアジアや中東に対してアプローチし、協力していくべき課題は益々増えていきます。私自身も国際市場の研究という面から、石油の供給安定化のために尽くしていきたいと思っておりますし、JCCPの皆様にも一層の努力をお願いしたいと思います。

